黒色トワイライト

一之瀬六樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒色トワイライト

【Ｎコード】
Ｎ５８８７Ｙ

【作者名】
一之瀬六樹

【あらすじ】
ＵＭＡの存在する近未来のお話。たった１０歳の少女である春日メイは、ＵＭＡと戦うための特殊な訓練を積み、三宅咲麻という執行官の青年と二人きりで暮らしていた。平和だったメイの日常。それはあるＵＭＡによる猟奇殺人事件にかかわることをきっかけにして……

序章　ブロッコリー（前書き）

まえがき

この作品は、新人賞への投稿を目的として書かれています。

そのため、お話が完結する前に更新が長期間止まってしまったり、予告なく公開が停止される場合がございます。

どうか以上のことをご理解頂いたうえで、気長にお付き合いくださいますようお願いいたします。　一之瀬六樹

序章　ブロッコリー

春日メイには、数年前までは東京都アースタウン千代田の郊外に、綺麗な髪の色をした母親と一緒に住んでいたという確かな記憶がある。

母は貧乏だったが、常にどこで身につけたのだかわからないような品格を備えていて、その身なりや仕草に伴う気品においてはメイの知る限り右に並ぶ者はない。その香りは正しい成人女性の見本として、春日メイという齢十歳の少女の中に今も確実に根付いている。

父親の顔など見たことが無い。母がいなくなったのはメイが六歳の頃で、母が幼い自分にどんなことを話したかなんてことは正直なところはっきりと覚えていない。

だが若く気品あふれる母は、メイの父親について何かを語ることはおろか、その存在を匂わしたことすら一度もなかった。したがって自分が顔も知らない男と母との間に生まれた娘であるという実感は、メイの意識の完全に外側にある。

でもその代わりに……。託児施設からの帰り道に、母はよく職場の話をしてくれていた気がする。

その中でもとりわけメイがよく覚えていたのは、母の後輩として新しく就任した、まるで物語のヒーローのような天才エージェントの話だった。

「エージェントって、なに？」

「みんなを守る、ヒーローのことよ」

母は確かにそう言った。

「ひろー？」

「ひろーじゃなくて、ヒーロー。悪いＵＭＡ＜ユーマ＞をやっつける、正義の味方」

メイがエージェントという職業を知ったのはその時が最初だった。母が自分の仕事について詳しく説明してくれたのは、それが初めてだったからだ。母はエージェントと作戦行動を共にする執行官という仕事をしていたので、執行官とペアを組むエージェントは、いつも母が教えてくれる物語の中心にいた。

「彼って、本当にすごいの。まだ大学生の新米エージェントなのに、AランクのUMAをたった一人で倒しちゃったんだから」

母は耳にかかる綺麗な黒髪を手で整えて、いつもよりも饒舌に語る。

「おかげで今回の被害はまったくのゼロ。A級事件で始末書を書かずに済んだのは初めてね。つい先月に、高校生から候補生やってた例の天才君が、エージェント卒業試験に初回合格したって聞いただけも私はお腹いっぱいだったんだけど……。あの子はそんなんじゃ、まだ満足できないのかな？」

「？？」

「あ、ごめんなさい。これじゃメイには、何の事だかわからないね」

「ううん」

母親の顔から急に笑顔が失せたのを見て、幼きメイは反射的に首を振った。

「ひーろーのお話、ききたい。ママ、つづけて」

「そう？　じゃあ、今度はメイにもわかるように話すわね」

それから母は、そのヒーローについてもっと詳しく話してくれた。

なんでも、そのヒーローはママの部下らしい。部下というのは年下の友達みたいなもので、ママとヒーローは一緒に悪いUMAをやっつけるのがお仕事なのだ。でもそのヒーローは結構わがままだから、あまりママの言うことを聞いてくれなくて、ママはいつも困っているのだそうだ。

「だからメイは、あんな子に育っちゃダメよ？」
「うん」
メイは素直に頷いた。
「あ、でも、ママ」
すぐに間違いに気づいて、メイは言い直す。
「わたし、おっきくなったらひーろーになりたい」
「――」
母は途端に硬直したようだった。

「ひーろーになって、みんなを守るの」
「えっと、どうして？」
「だって、かっこいい！」
「うーん……」
「むずかしい？　メイにはだめ？」
「そうじゃなくって――」
母はいつも笑顔だったが、この時だけはあまり、嬉しそうな顔をしていなかった気がする。

「メイは、他になりたいものはないの？　ほら、お花屋さんとか、ケーキ屋さんとか」
「ううん。ひーろーになりたい」
「女の子はヒーローにはなれないのよ？」
「やだ！　ひろーになる！」
子供は、一度こうと決めたら簡単には譲らないものだ。
とくにメイは昔から、変なところで頑固だった。
「仕様のない子」
母はそこで、ようやく笑った。
「そうねぇ。じゃあ、メイがブロッコリー食べられるようになったらいいよ」
「ほんと？」

「うん。ママは嘘つかない。だから今日の晩御飯は、ブロッコリー丼ね」
「ブロッコリーどん！？」
「前から一度作ってみたかったのよね～。ぜんぶ食べられたらメイ、ヒーローよん？」
「う。じゃあがんばる」
「うん。がんばれ」
「……ひーろーになったら、ママも守ってあげるね？」
「そっか。期待してるわ」

結局、ブロッコリー丼は食べられなかった。
薄い醤油で味付けがされているとはいえ、大きなどんぶりの上に乗っかっている大量のブロッコリー。その姿はメイの好き嫌いを急激に加速させるのに充分なインパクトを誇っており、あれ以来メイはブロッコリーと聞くだけで小さな悲鳴が出るようになった。

でもあの時ちゃんと食べていられたならば、もしかすると母が自分の前からいなくなることはなかったのではないかと、今でもちょっと思うことがある。

第一章　ひよこ模様のエージェント　1

月の無い夜の住宅街。耳鳴りがするほどに静かで、犬の遠吠えも車の走り去る音も響かない。
薄暗闇の中、赤い外套を着た小柄な少女がアスファルトの上に立ちつくしていた。
「……」
裏道にて静かに立つ道路灯に照らされ、闇夜にすら光り輝くみどりの黒髪。
その艶の深さは、少女の幼さをよく表していた。夜の住宅街にたった一人でいるという状況にまるで似つかわしくない。だがそれに反して、少女の瞳は猛禽類＜もうきんるい＞のように大きく見開かれ、体内で解放されたエーテルの輝きを受けて紫色に光っていた。

『ミッション　スタート』

どこからか住宅街に木霊する、機械的な女声。
直後、少女の背後から背丈三メートルほどある大猿のＵＭＡが現れる。それと同時に、ＵＭＡは少女の脳天を目掛け、全体重とありったけの攻性エーテルを乗せた一撃を放った。
しかし、その両手が住宅街のアスファルトを粉砕した瞬間。ＵＭＡの喉元を、銀の刃がぬらりと一直線に通り抜けていた。
一言のうめき声も発さず、そのまま前のめりに倒れるＵＭＡ。その背中には先程の赤い外套を着た少女が、首筋に小太刀を突き立てるようにして圧しかかっている。
やがて少女が小太刀を首から勢いよく抜き取ると、ＵＭＡの体は青白色に光る粒となって空気中に霧散していく。

体細胞の構造が、動植物とは異なる稀少生物――ＵＭＡ。その細胞がすべてエーテルと呼ばれる特殊な霊的反物質から構成されていることが明らかになってからというもの、彼らの持つ能力の秘密が次第に明らかになってきた。

どこからか現れ、人を襲い、どこかへと消えてゆく異生物。人類が初めて彼らに生身で対抗できるようになったのは、わずか十数年前のことである。従来の刃物や火器が改良され、武器の形をした「ドローアデバイス」を媒介して、人類の持つエーテルを身体の外側へ引き出すことができるようになった。

見る人が見れば少女の持つ小太刀の形をしたそれが、世界最先端の技術を駆使して造られたデバイスであることは明らかだろう。

そしてそれ以上に……純度の高いエーテル体で構成されているＵＭＡの身体を、一突きで貫ける少女。その体内に秘められたエーテルが人並み外れていることに、驚きを禁じ得ない。

『エクセレント』

響く機械的な女声。

『シミュレイション　ケース５０　レディ――』

機械声に従って、少女の立ち位置はそのままに、徐々に周囲の情景が切り替わってゆく。

先程までとは打って変わって、今度は昼間のショッピングモール。モールを行き交うエキストラ達のヴァーチャルリアリティも、かなり入念に作り込まれているようだ。

『ミッション　スタート』

――これで最後だ。

外套の少女、春日メイは小太刀を握る手に力を入れ、やがてどこからか現れるはずのＵＭＡの気配を探る。

半年前の卒業試験ではさっきのＵＭＡに不意打ちでやられたので、今度は開始からエーテルを解放して隙を作らないように身構えていた。その作戦が功を奏したのか、今回は自分でも不思議なくらいに

あっさりと、鬼門だったケース４９をクリアすることができたのである。
だが、ラストミッションであるこのケース５０は初見だ。相対するＵＭＡも、クリア条件も一切わからない。
ここでミスをすれば、また半年後の卒業試験までお預け。エージェント候補生として、訓練の日々に逆戻りになってしまう。
訓練ばかりの毎日も、べつに嫌いじゃない。けれど正式なエージェントにさえなれば、ＵＭＡの駆除を主な職務とする執行官の仕事を手伝えるようになる。
そうなれば、きっと三宅さんも――。
「……」
激しい緊張、そして期待に、幼い顔がこわばる。
「……？」
ただし彼女の緊張の糸は、そう長くはもたないのが常だった。

‡

「ねえ三宅さん！　ＵＭＡ出てきませんよ！？」
高く、芯の細い儚げな声で、メイはショッピングモールの天井に向かって呼びかけた。
天井にはヴァーチャルリアリティの風景が投影されているばかりだが、この訓練場で何度も仮想訓練を続けてきたメイは、そこに光学迷彩処理のされたモニタリングカメラが設置されているのを知っている。
そしてモニターの向こう側にある観測室では、メイの保護者でもあり、危険ＵＭＡ特別対策庁――通称アフスの執行官である三宅咲麻<みやけさくま>が、彼女の様子をやきもきした様子で見守ってくれているはずなのだった。
『――』
スピーカーから漏れる雑音から、観測室でマイクのスイッチが入

れられたことがわかる。
　しかしそこから三宅の返事はおろか、他の試験関係者各位の喋り声も聞こえない。おそらくまだ試験の最中なので、だんまりを決め込んでいるのだろう。
「あのー！　これって、壊れてるんじゃないですかー！？」
　紫の眼光を宿したまま、メイは吹き抜けになっているショッピングモールの天井に向けて、そういったことを叫び続けていた。
「三宅さ……」
　その時、ショッピングモールの巨大シャンデリアが青白く発光し始める。
　そこに向けて、強力なエーテルが充填されていくのをメイは肌で感じた。
「……ん？」
　そしてその直後、ショッピングモールの照明が、すべて消える。
「て、停電？　――わ、た、きゃあっ！」
　突然の落雷。
　激しい轟音とともに閃光が発せられ、メイの立っていた地点に大きな穴が開いた。
　それから若干遅れて、ショッピングモールの照明が元に戻る。
「うひゃ～……」
　寸前で落雷を回避したメイが穴の中を覗き込むと、モール全体を支える石の土台はおろか、その下の大地までが真っ黒焦げにえぐり取られ、底が見えなくなっていた。
『油断するな。メイ』
　三宅の声だ。
　いつも冷たい声色だが、これを聞くとメイはなぜか落ち着く。
「ゆ、油断って……。なんで建物の中なのに、雷が」
　額に嫌な汗を流しながら、やや引きつった顔でつぶやく。
「ていうか、これ、当たったら普通に死ぬんじゃあ……」
『物理ダメージは最少に設定してある。君の抵抗力なら、気を抜か

ない限り直撃を喰らっても死にはしない』
三宅はスピーカー越しに、なんでもないような声色で応えた。
「ということは、気を抜いてたら死ぬかもしれないんですね……」
『訓練で死ぬようなら、どうせ実際の任務は無理だ。嫌ならギブアップしろ』
「や、やります！　やらせてください！」
姿勢を正し、小太刀を構えるメイ。
「せっかくここまで来たんだから意地でもエージェントになって、絶対に三宅さんのお役に立って見せます！」
意気込みに応じて、瞳の中のエーテルも鈍い輝きの強さを増す。
『そうか』
三宅の声を残して、モールの電灯がまた一瞬消えた。
「！！」
放出される雷のエーテルを察知して、メイは瞬時に建物の二階に跳躍した。
すると直前まで立っていた地点を二度目の落雷が襲い、大穴がふたつ並ぶ形になった。
「あぶない、あぶない」
ふぅと息を吐く。敵の攻撃精度はやはり完璧のようだ。
しかし、二度の攻撃でその法則性もある程度わかってきた。
まず、落雷には充填時間が必要。次に、放電前には一瞬だけモール内の電気が消える。さらには、必ず直前に自分のいた地点に向けて雷が落ちる。
「つまり……電気が消えたときにその場から動いてれば平気、ってことだよね」

第一章　ひよこ模様のエージェント　2

『目標の名前はダークホース。周囲の電力に自分のエーテルを干渉させ、強力な放電を促すことのできる動物型のＵＭＡだ』

三宅の声が冷静に敵の情報を告げた。

『平原などの開けた場所ではさほど脅威にはならないが、都市部などの人口密集地では、周辺の放遊電力を誘導させて手がつけられない状態になる。民間人に被害が及ばないよう注意しつつ、迅速に駆除にあたれ』

「駆除って言っても、本体がどこにも――」

雷を避けつつ、周囲を見回す。

突然の落雷にざわつく人、人、人。所詮は仮想現実の世界だが、妙に芸が細かい。

「ていうか、人が多すぎるよ……。今までの訓練では民間人なんていなかったのに」

これまでの訓練は、基本的に警視庁からの出動要請を受けてから駆除にあたる場合を想定したものだった。そのため戦闘現場では人払いがされていたのだが、今回のような人込みでは、メイの最大の長所である俊敏性が大きく削がれてしまう。

『実際の任務では、理想的な状況下でＵＭＡを駆除できることなど稀だ』

三宅がメイをなだめすかすように言った。

『だから前回のケース４９では、エージェントが夜道で突然背後からＵＭＡに襲われる場合。今回のケース５０では休日にショッピングモールへ買い物に来たエージェントが、偶然ＵＭＡの出現に居合わせるというケースを想定している』

「え～……」

どちらも交通事故に遭うより確率が低そうだ。

『そういう最悪の局面でもうまく切り抜けることのできる判断力、

それから身体能力をテストする趣旨だ。文句を言うな』
「ほとんどありえなくないですか？　その設定」
　あまりに不利な状況すぎて、どこか設定者のサディズムさえ感じられる。
『まあ、極端な局面を選びはしたが……だが実際にあったケースだからな。これに一人で対処できないようなら、エージェントになることなど俺が絶対に認めない』
「せ、せめてヒントをください！　ほ、ほら！　エージェントになったら個別無線だってあるじゃないですか？　三宅さんの指示なしで動くことなんてほとんどないんですから、それくらいは――」
　言いかけて、メイは口をつぐむ。
「ごめんなさい。それも自分で考えなきゃ、ですよね」
　あまり愚痴やワガママを言って三宅を困らせるのは、メイの本意ではない。
　それに三宅に本心から認めてもらえなければ、メイがエージェントになる意味も資格もない気がした。
『いや。思い出した』
　だが観測室のマイクからは、意外な反応が返ってくる。
「な、何をですか？」
『この事件を実際に処理したエージェントがＵＭＡの出現に居合わせたときには、現場にはパートナーである執行官も一緒にいた。その時のエージェントも今の君とおなじく遠距離攻撃への対処に困っていたんだが、パートナーである執行官のアドバイスをきっかけにして、その状況を打破したんだ』
「へぇ、そうなんですか。……でも、どうして三宅さんがそれを？」
　あとになって報告書で得た情報にしては、見てきたように具体的すぎる気がした。
「これは昔、俺が担当した事件だ。あの日は非番の買い物中だったが、突然ヤツが現れた」
「え――」

メイの表情がこわばる。
メイの知る限りでは、三宅が自分以外の誰かと休日に買い物へ出かけたことなんて過去に一度もないはずだった。
『どうした？　メイ』
「あの――三宅さん。そのとき一緒にいた三宅さんのパートナーの人って――、その、もしかして女性の方……ですか？」
『……』
不意に返事が途切れる。
『なぜそんなことを気にする』
短い沈黙のあとにスピーカーから放たれた言葉には、会話を遮るような冷たさがあった。
「あ、いえ……。なんでもありません」
『ヒントが欲しいんだったな』
三宅は、いつも通りの淡々とした口調で解説を始めた。
『ヤツの姑息な攻撃方法からもわかるように、ダークホースは動物型のＵＭＡにしては知能が高い。加えて、現場は人口密集地に位置するショッピングモール。ダークホースのような大きな動物型ＵＭＡが何の策も練らずに入ってきたのならば、その時点で大騒ぎになっているはずだ。しかし最初の落雷まで、そうなっていなかったということは――』
「えっと、ＵＭＡは人間の姿に擬態している」
エージェント候補生として講義で習った内容を、そのまま復唱するメイ。
『そういうことだ。現場には奴のエーテル残滓が充満しているから、エーテルの臭いで追跡することはできない。今のヒントを参考にして、民間人に紛れているＵＭＡを探し出せ』
「了解です」
頷きながら返事をして、メイはすぐに二階の欄干＜らんかん＞へ飛び乗る。
その上を走りながら、階下に見える民間人の顔を一人ずつ確認し

ていくことにしたのだ。
「よく見ると、結構いいかげんなんですね……」
民間人の中には、テレビで見た芸能人や現職総理大臣をはじめ、メイも会ったことのあるアフスの職員や？へのへのもへじ？な顔の人もいた。おそらくヴァーチャルプログラム制作でＮＰＣを担当したスタッフの遊び心だろう。
「あ。あの人、三宅さんに似て――――きゃあ！」
落雷をギリギリまで避けなかったせいで、体勢を崩してしまうメイ。
『だから油断するなと……』
「し、してません！」
起き上がり、すぐさま状況を確認する。
さっきの一撃は電気が消える直前に、わずかに民間人の間でエーテルの光が発せられていた。ダークホースは放遊電力に干渉すると三宅が言っていたが、その干渉波に使われたのが先程の光だったのだろう。
「ということは」
ちょうどこの近くに、民間人に交じって目標のＵＭＡがいる。
メイはシャンデリアの上に飛び乗り、再度意識を集中させて、民間人の顔を俯瞰＜ふかん＞した。

第一章　ひよこ模様のエージェント　3

「……いた！！」
一目でそいつがＵＭＡだとわかるほどに、異様な面相である。
紺色のスーツを着た、サラリーマン風の――――馬ヅラ。
より具体的に表現するならば、それは二足歩行する馬そのものだった。

「こ、これが最後のＵＭＡ……？？　み、三宅さん！」
『……ダークホースは動物型のＵＭＡで頭も良いが、擬態がものすごく下手でな』
「服着ただけじゃないですか！」
「だがあれで本人は上手く化けているつもりなのだ。性格はいたってデリケートだから、まあその、あまりそのことには触れてやるな」
「なんで周りの人は普通に受け入れてるんだろう……」
メイにジト目で見つめられた黒馬のＵＭＡことダークホースは「バレたっ！！」と言わんばかりに目を見開いて、身体をプルプルと震わせている。
大量に汗をかくのは人間と馬だけと言われているが、それは冷や汗も同じらしい。彼の顔はタテガミまでぐっしょり濡れていた。
「しかも、なんか斬るのが可哀相になってきたんですけど……」
『離れた場所から一撃で死ぬような攻撃をしてくるヤツだぞ。遠慮はいらん』
「は、はぁ」
曖昧な返事をして、メイはシャンデリアから目標のＵＭＡめがけて飛び降りる。
しかしその瞬間を狙っていたかのようにして、メイの目下でダークホースが口を大きく開き、歯をむき出しにした。
「！？」

メイがその異変に気づくと同時に、ダークホースの口の中から青白い電撃が放たれる。
「くっ……！」
避けきれないと悟ったメイは、全身のエーテルを外側に向けて放出した。するとメイの身体の外側に、大きな炎を纏うようにして紫色のエーテルが防御の膜を張る。
幸い、ダークホースが咄嗟に放ったその電撃は、モール内の電力を集めた落雷の威力にはほど遠かった。それはメイの身体を覆うエーテルを貫通するどころか、逆にその軌道を歪曲され、電撃はあさっての方向へ飛んでゆく。
「やあああああっ！」
落下中のメイが振り下ろす、紫色の攻性エーテルを纏った剣刃。
落下スピードを上乗せされたそれはメイの小太刀を離れ、目標へ向けて音速のごとく突き進んでゆく。
剣刃は、血眼を見開くダークホースの体を斜め一直線に切り裂いた。
断末魔となる馬のいななき。
直後。ダークホースの全身は、青白い光の粒となって空気中に爆散した。

「――ふぅ」
自らの放った技の反動で、少し離れた地点に着地するメイ。

『コングラチュレイションズ！　オンユア　グラジエイション！』
「ありがとう」
メイが女声プログラムに返事をすると、ショッピングモール内にファンファーレが鳴り響く。気がつくと先ほどまで怯えうろたえていたはずの周囲の民間人も、今は皆、メイに向けてにこやかな拍手を送っている。
「あ、あはは……。恥ずかしいな」

恥ずかしまぎれに自分の頬を撫でるメイ。
ファンファーレが鳴り止むと同時に、訓練場内のヴァーチャルリアリティが解かれ、周囲の景色は鋼色の広大な空間に戻っていく。
メイはその中心にある円盤型のエレベーターに乗り込むと、ゆっくりと観測室へ昇っていった。

2

「おーっし！　やったな嬢ちゃん、おめでとう！」
卒業試験を終えたメイに一番に駆け寄ってその肩を痛いほどに叩いたのは、訓練中に何度も世話になったアフス職員の有沢健次＜ありさわけんじ＞。
着崩した制服がなければ繁華街を昼間からうろついている若者と見た目がそう変わらない、ボサボサの金髪頭をしたオペレーターだ。
「有沢さん、ありがとう」
「よかったなぁ！　これで嬢ちゃんもようやく正式なエージェントだ！」
「驚きましたよ。最後のアレ、なんなんですか？」
「ファンファーレのことか？　ふふん、オレから嬢ちゃんへの特別プレゼントさ」
「それもびっくりしましたけど、あのＵＭＡのことです。たしかに強かったですけど、妙に人間的だったっていうか、拍子抜けしたっていうか……」
「あー、アレな。アレは――」
話し込む二人の横に、黒いカジュアルスーツの男が立ち止まった。長身で、髪は少し長めだが、あくまで清潔に見える範囲で整っている。顔の掘りは深く、今も無表情。本人に自覚はないものの、それは対面する相手に威圧するような印象を与えかねないものだった。
「あっ――」
はしゃいでいた自分に思わず赤面し、うつむいてしまうメイ。
「あ、あの……、三宅さん。わたし」
「よくやったな、メイ」
「は、はい！」

メイははにかむような笑顔を向け、三宅の握手を求める右手に、両手で応えた。
「正直、こんなに早くクリアするとは思っていなかった」
「が、頑張りましたから……！」
「そうだな。君は頑張った」
そう言って、さびしげに微笑む三宅。
「俺にはまだ本部で書類関係の仕事が残っている。悪いがメイ、先にマンションへ帰っていてくれ」
「い、いえ。三宅さんのお仕事が終わるまで待ってます」
「そうか」
三宅は有沢に向き直る。
「おまえ、この後はオフだったな。少し相手をしてやってくれ」
「ああ。わかった」
「すまない。すぐに終わらせる」
そう言い残すと三宅は自動ドアを通り抜け、さっさと観測室を出て行ってしまった。
「なんだろ……。三宅さん、あんまり喜んでない気がする」
やや落ち込みながら、三宅の出て行ったドアを眺めているメイ。
「うーん、そりゃそうだろうなぁ」
その様子を見て、有沢は困ったような表情で言った。
「なにが、そりゃそうなんですか？」
「だってアイツ、嬢ちゃんがエージェントになることに、最後まで反対してたわけだし」
「え、うそ？」
「さっきの話の続きになるけどよ。このエージェント候補生卒業試験ってのは、一般の訓練生ならケース２０で終了だったんだよ」
「え……」
大きく息を吸い込む。
「えええええええええええ～！？」

メイが驚くのも無理はない。
正式なエージェントの資格をもらって執行官である三宅とペアを組み、ＵＭＡを駆除する仕事を手伝う。――そのためだけにメイはこの数年間、厳しい訓練と卒業試験での途中リタイアを繰り返してきたのだ。
「嬢ちゃんがケース２０をクリアしたのが、たしか二年前……八歳のころだろ？　あんとき本当はもう免許をやってもよかったんだけど、三宅がすごい剣幕で反対してさぁ」
「な、なんで……？」
「まだ年端もいかないような子供にエージェントが勤まるわけがない！　とか、たとえ能力は優秀でも、精神的な未熟な子供を任務に就かせると大きな失敗に繋がる！　とか言ってたな」
「き、厳しい……。さすがは三宅さん」
「んな立派なもんじゃねえよ？　オレにはただ、大事なメイちゃんがＵＭＡにやられてケガしたら嫌だから免許はあげない～！　ってダダこねてるようにしか見えなかったもんよ」
「あ――」

ただ三宅の仕事を手伝うためだけに頑張ってきたメイには、三宅がそれをどう思っているかなんて考えたこともなかった。そして有沢の話が本当なら、理由はどうあれ三宅は、メイがエージェントになることなどこれっぽっちも望んでいなかったということになるのだ。
それはメイにとって、考えていたのとはまったく真逆の事実だった。
「本部の人間はみんなわかってんだから、そうならそうと正直に言やぁいいのによ」
さらに深く落ち込むメイを尻目に、有沢は続ける。

「そうすりゃ嬢ちゃんが大人になるまで免許保留ってことですんだのに、面倒な理由つけやがるんだわアイツ。そのせいでこじれて、嬢ちゃん専用の特別プログラムをクリアしたら、そんときには卒業を認めようってことに落ちついたのよ。それがあのケース２１からケース５０の試験ってわけ」

「途中から急に敵が強くなった気がしたのは、気のせいじゃ……なかったんですね」

ふらふらと壁に手をつき、がっくりとうなだれるメイ。三宅の気持ちは空回りし、メイが不当に苦労させられる原因になっただけだったわけだ。

第一章　ひよこ模様のエージェント　5

「あーそうそう。たしかそんときの計算では、嬢ちゃんが成人するくらいの歳になれば、もしかしたらケース５０をクリアできるかもしれねぇな――ってトコだったんだよなぁ」
煙草を取り出し、頭に浮かんだ思い出話を流れるように語り続ける有沢。
「なのに嬢ちゃんがものすげぇ速さで成長するもんだからさ、ヤツの悪だくみは結果として、嬢ちゃんの卒業をたったの二年間ほど伸ばしただけで終わっちまったってわけだ。きっとアイツとしてはそこが面白くねぇんだろうなぁ。……あ」
うっかり口を滑らせすぎた有沢がメイの顔を振り向くと、メイは涙を浮かべてぷるぷると震えていた。
「うっ……！　うぐ、ひっく……！」
嗚咽まじりに、あふれ出す涙を拭うメイ。
「わ、わだし、知らなくて……！」
「あーいやいや！　嬢ちゃんは悪くないんだぞぉ？」
あわてて有沢はポケットからイチゴ味のキャンディーを取り出し、必死になだめようとする。
「ほら、アメちゃんやるから！　な？」
「……ぐ、ひっく……！」
メイは泣きながら素直にそれを受け取ると、ビニル包装を破り、口の中で転がし始めた。
それを確認して有沢は、ほっと胸をなでおろす。
「そのぉ、なんだ。アイツも嬢ちゃんがエージェントになったこと、そんなに嫌がってるわけじゃないと思うぜ？」
「ほんと……ですか？」
「ああ、ホントさ！」
大袈裟にジェスチャーし、有沢はまだ十歳のメイに向けて全力で

愛想を振りまいた。
「ここだけの話、最後のケース５０のＵＭＡな。あれは三宅が自分でプログラミングしたものを、本番直前で挿し替えたものなんだ。メイがエージェントとしてやっていくなら、最初に乗り越えてほしい相手だ、とかなんとか言ってたな」
　思い出しながら、うんうんと一人でうなずく。
「きっとアイツ、もう嬢ちゃんを止める気なんてなかったんだと思うわ。だって本当に止める気なら、そこで絶対に勝てないような極悪なＵＭＡをプログラミングしてくるはずさ。あいつの性格ならな」
「……」
「まあ、オレに言えるのはこのくらいだわな。あとは家に帰って、アイツに直接確かめな」
　有沢はニカリと白い歯を見せて、顔に涙あと残るメイの背中をぽんと叩いた。

3

アフスの更衣室で白と黒を基調にしたゴシック調のワンピースに着替えたメイは、手持無沙汰な様子でエントランスロビーに立っていた。

仕事を終わらせた三宅が部署内で待機していた彼女をそこへ呼びだしたのは、結局試験終了から三時間ほど経ってからのことだった。もう夜も遅い。アフス本部ビル内で営業している売店も、ちょうどメイの見ている前で閉店の準備を始めているところである。

「すまない、メイ。遅くなった」

「いいんです。三宅さんが忙しいの、わかってますから」

さすがに遅くなりすぎたので有沢には先に帰ってもらったが、メイは三宅のいないマンションへ一人で帰ってもやることがない。メイにとっては三宅のいる場所が自分のいるべき場所である。記憶のはっきりしている六歳の頃からというもの、メイはずっとそうやって育ってきたのだ。

「あの、三宅さん」

待っている間にも、何度も有沢の話を思い出しては一人で凹んでいたメイ。

「あの……」

今も三宅を正面から見れないで、申し訳なさそうにうつむいた。

訝しむ三宅。メイはその様子を感じてようやく顔を上げ、まず卒業してしまったことを謝ろうとする。

ところがそこで、メイの瞳に三宅が右手持っている小さな箱が映った。

「あれ？　その箱……なんですか？」

赤とピンクのストライプの包装紙にくるまれ、黄色いリボンまでつけられた小さな箱。その可愛らしさは、寡黙男子である三宅が持つには、まるで似合っていなかった。
「気になるか？」
「あ、い、いえ。別に……」
三宅はそのままなんでもないような顔をして、メイにそれを手渡す。
「はい？」
受け取るが、驚きのあまり、妙な声が漏れてしまうメイ。
「開けてみてくれ」
「で、でも……」
「いいから」
三宅に促され、メイはその場でリボンをほどき、箱を開けた。
中に入っていたのは、可愛らしいピエログマの腕時計。
メイが以前セレクトショップで物欲しそうに眺めていたのと、まったく同じものだった。
「卒業祝いだ」
「え？」
「いや、その。まだ言ってなかったのをあとで思い出したんだが」
三宅は一瞬だけ気恥ずかしそうに目を閉じたあと、微笑を浮かべた。
「卒業おめでとう。今日から君は、立派な一人のエージェントだ」
「み、みやけさん……！」
手渡された箱をおもいきり掴んだまま、三宅の胴体に抱きつくメイ。
「こ、こらメイ！　こんなところで……！」
三宅はあわてて周囲を見回す。
顔見知りでもある受付嬢二人が、こちらを見ながらクスクス笑っていた。
「みやけさん、みやけさん……っ！」

恥ずかしいことこの上ないが、涙して幼い子供のようにすがりつくメイを無理やり引きはがす気にもなれない。
「ごめんなさい、わたし、わたし……！」
スーツに顔を押しつける、涙まじりのメイの声。
「な、何を言っているんだ。謝る必要などないだろう」
「三宅さんが、わたしのために……っ、知らなくて、卒業しちゃって……！」
「――！」
それだけで三宅は事情を察した。
有沢め。と、ただでさえ鋭い目を釣り上がらせる。
「気にするな」
三宅は自分の身体に押し付けられた頭の上へ、その大きな手のひらを優しく置いた。
「いつかは君がエージェントになるなんてことは、最初からわかっていた。それが遅かったか、早かったかという違いだけだ」
「……」
顔を上げ、涙目で三宅を見つめるメイ。
「子供の君を任務に就かせなければならないのは、たしかに心苦しい。しかしそれ以上に、俺は君の成長を心から嬉しく思っているよ」
背中を曲げ、三宅はメイの背の高さに合わせる。
「俺は口下手だからな。ちゃんと伝わらなかったというのなら、もう一度言おう」
それから、小さく咳ばらいをして、三宅はその言葉を告げた。
「卒業おめでとう、メイ」
「……はい」
メイが涙を拭いて、ようやく笑顔を見せる。
「ありがとう、ございます」
すると三宅も、小さく笑った。

4

黒塗りのセダンから降りると、二人は都内にあるタワーマンションのエレベーターを昇り、高層部にある一室の扉を開けた。
「ただいまー」
色鮮やかなピエログマの腕時計をしたメイが、嬉々として先に中へと入ってゆく。
「おかえり」
あとから入った三宅が、玄関の照明をつけてメイを迎える。
すると今度はメイがくるっと振り向いて、玄関から中へ入ろうとする三宅の前に笑顔で立ちふさがった。
「……ただいま」
「おかえりなさい。三宅さん」
メイが三宅と一緒にマンションへ帰って来たときは、こうした挨拶を交わし合うことがいつしか定着するようになっていた。
それがいつからだったかなんてことは、三宅ももう覚えてはいない。
ただ少なくとも、四年前――メイがまだ、ここへ来たばかりの頃。
メイに一人で留守番をさせてることの多かった三宅は、幼い少女の待つ真っ暗な部屋に帰るたびに、心苦しく感じていた。
三宅はそれを、ぼんやりと思い出していた。

「あれ？」
リビングにやってきたメイ。
ソファの前に鎮座する低いガラステーブルの上に、見慣れない箱がいくつも置かれているのに気づいた。
「三宅さん、コレ……？」

「ああ。それはな、なんとプレゼント第二弾だ」
「え！？」
メイの目が輝き始める。
「今朝、家を出る前に用意しておいた」
包装こそされていないが、買ったばかりの新品であることは見て取れる。
至れり尽くせりの展開にメイは大歓喜である。
「三宅さんっ！　これも、開けていいですか？」
「ああ、いいぞ」
「なんだろう……？」
わくわくを抑えながら、ゆっくりと箱に手を伸ばすメイ。
もちろんこの箱はピエログマの箱や包装紙と同様、あとでクローゼットに入れて大切に保管しておくつもりである。
「この大きさ……お洋服かな？」
胸を躍らせ、メイは白い紙箱のふたを開けた。
「わぁ！」
箱の中に入っていたのはホワイトベージュのブレザーだった。
「これ、制服ですね！？」
「ああ。前から注文していたものがやっと届いたところだ」
「え？　前から注文って……。そういえば、わたしの卒業祝いの制服なんですよね？」
卒業試験が今日なのに、前から注文してあって、しかもリビングに用意されていたのはどういうことだろう？
「君なら、今回の試験で必ず卒業すると思っていたさ」
メイの言いたいことが伝わったのか、三宅は前々から準備していたことを明かした。
「他の箱には、ブラウスやネクタイなんかも入っている。すべて君のものだ。メイ」
「そ、そうだったんですか……！　三宅さん、ありがとうございますっ！」

満面の笑みでブレザーを取り出し、袖を広げるメイ。
「へぇ〜、エージェントにも制服ってあるんですねー！」
「……」
三宅はあえて口を挟まずに、リビングの奥のクローゼットを開けて、自分のスーツとネクタイを丁寧に収納し始める。
「あれ？　でもこれって、近所の小学生が着ている制服とものすごく似ていますね」
そこで、ようやくメイがその事実に気づいた。
「ものすごく似ているんじゃなくて、近所の小学生が着ているのとまったく同じものだよ」
三宅は落ち着いてクローゼットを閉めつつ、なんでもないような言い方でそれを告げた。

第一章　ひよこ模様のエージェント　8

「しょ、小学生！？」
途端に笑顔が驚きに変わった。
「ひ、ひどいですよ三宅さん！　い、いくらわたしの背たけが足りないからって、仮にも政府所属のエージェントなのに、小学生と同じものを着ろだなんて――でも嬉しい！」
感情が入り混じってしまい、怒るべきなのか喜ぶべきなのかわからない。
メイが一人で暴走しているのを見て、やれやれ、と三宅は人知れず頭を振った。
「エージェントに決まった制服はない。いつも着ている赤い外套で充分だろう。この制服はエージェントとしてではなく、民間人として君が来週から小学校に通うためのものだ。ほら、ここに校章が入っている」
「あ、ほんとうだ」
メイが勝手な思い込みでアフスのマークだと思っていた胸のワッペンには、『翠小』という白い文字が、くっきりと縫い付けられていた。
「あの、嬉しいのは嬉しいんですけど、ちょっと状況がのみこめないような……」
目を細めて、小さな頭の中をぐるぐる回す。
「――え？　小学校に通うんですか！？　わたしが！？」
「任務もいいが、普通の子供としての日常も大事だ」
キッチンに立ち、夕食を作る準備を始めようとする三宅。
「候補生としての訓練も終わったのだから、以降は基本的にエージェントとしての出動命令を待つことになる。空いた時間を無駄にするよりは、少しでも普通の生活に馴れておくべきだ」
「そ、そんな！　わたしは小学校なんて、べつに……」

「いやなのか？」
「イ、イヤなわけじゃ、ないですけど……。で、でも！」
メイは小学校には通わず、基礎的な教育はすべてアフスの訓練を通して受けてきた。
だが今日でその訓練も終わり。被保護者ではなくパートナーとして、ようやく自分を育ててくれている三宅への恩返しができると思っていたのである。
ところが、そこへご褒美として与えられたのは初等教育への逆戻り。
もちろんメイにとっては一般の小学校など未知の世界で、今よりも幼い頃には憧れてさえいたこともある。しかしそれとこれとは話が別で、どこまでも子供扱いされていることに対して不満を隠せないのだった。
「そうか。なら、言い方を変えよう」
それを察している三宅は冷蔵庫からキャベツを取り出して手早く洗い、それをまな板の上に置く。
「メイ。これは任務だ」
振り向き、穏やかな微笑をメイに向けた。
「待機中は民間人として生活し、許される限り自由に行動すること。普通の少女として小学校に通い、そして」
三宅にしてはめずらしく、おどけるようにして手を広げる。
「君の、君だけの幸せを、早く見つけてしまうこと」
「わたしだけの、しあわせ……？」
「そうだ。これまでの君の人生はすべてアフスの中にあった。だが君には、アフスからもエージェントからも離れたところで自分の人生を生きる権利がある。それを見つけることが俺の願いでもあり、君に課せられた任務だ」
「む、むぅ……！」
メイは頬を膨らませた。
「ずるい！　任務だとか俺の願いだとか言って、結局はわたしのた

めじゃないですか！」
「なんだ。わかってしまったか」
「もう子供じゃないんだから、わかりますよ！」
「ブロッコリーは食べられないのにな」
「ブ、ブロッコリーはっ！」
途端に表情が暗くなるメイ。
「……食べ物じゃありません」
「そうか」
その様子はどう見ても子供に見えるが。
……という言葉を、三宅は自分の胸の中だけで留める。
「ともかくですね……わ、わたしだって、三宅さんの役に立ちたいんです！」
「もちろん、そっちの方も期待しているよ」
聞きなれたメイの言葉に、ふっ、と鼻を鳴らす三宅。
「なんたって君は、アフス設立以来の最年少エージェントなのだからな。しかも仮想現実の中とはいえ、候補生の段階でＡランクのＵＭＡを軽く退治してしまった優等生だ。そんなエージェントなど他のどこにもいやしない。パートナーの執行官としては、この上ない自慢話の種になるな」
「で、でもそれは、三宅さんがへんに試験を難しくしたからじゃ」
言いかけて、メイはそれまで知らないでいた事実に気がつく。
「Ａランク！？」
「そう。ケース４９のビッグフットとケース５０のダークホースは、どちらも危険度ＡランクのＵＭＡだ。並のエージェントならば本来一人で駆除できるような相手じゃない」
「そ、そうだったんですか！？」
自分でも知らないうちに、メイはエリートエージェントの仲間入りをしていたようである。
「とにかく、パートナーができたことでようやく俺も現場に戻れる。苦情処理や訓練の書類ばかり作っているのはもう飽きたからな。期

待しているぞ、メイ」
「ま、まかせてくださいっ！」
「だがとりあえず、来週から君の職場は近所の小学校だ。朝は早いが遅刻するなよ」
「……」
何か言いたそうに沈黙するメイを尻目に、三宅はキャベツを刻み始める。
メイを育てると決める前はこの大きなマンションも立派なキッチンも、三宅にとっては無用の長物以外の何ものでもなかった。
しかし今はメイの存在が、この部屋の空気を実際よりも何倍も明るくしている。
険しくなりがちな三宅の顔は、知らずとわずかにほころんでいたのだった。

第二章　友達を作ろう！　1

1

小さい……。ここで何百人も一緒に勉強するとはとても思えない。
それが小学校の校舎に対して抱いた、メイの素直な感想だった。
「はーい転校生を紹介しまーす」
黒塗りのメルセデスで三宅に学校まで送られてからというもの、ただ言われるがままにあちこちに挨拶していったメイ。まだ心の準備のできないまま担任教師に連れられて、教室の前で立ち止まる段階まで進んでしまっていた。
騒がしくて気圧されてしまいそうな教室の雰囲気だったが、女教師の発した先のひとことで5年3組の喧騒はピタリと止む。
（ぎゃ、逆に入りづらい……）
ホワイトブレザーの裾をつかみ、緊張を押し殺そうとするものの、次から次へと緊張の虫はわいてきてしまう。
「じゃ、転校生さんどうぞー」
「し、しつれいします！」
嬉しさと戸惑いの入り混じるメイは、ぎこちない素振りで教壇の前まで歩み進めた。
教室がなにやらざわめき始めるが、緊張しすぎているメイには何も聞こえてこない。
「ほら、黒板に名前書いて。大きな字でね」
「は、はい。先生」
初めて握るチョーク。噂には聞いていたが、とても書きづらかった。
「ん～、いい子ね～」
メイの返事が気に入ったのか、一人だけニヤニヤしている女教師。
その間に、メイは黒板にお手本のように整った字で、『春日　メ

イ』と書きつづった。
「か……かすが、めいです。皆さん、宜しくお願いします」
ぺこりとお辞儀をするメイを、クラスメートはきょとんとした顔で見ている。
整った顔立ちに、白い肌。皺ひとつない新品の制服。
そして、長く艶やかな黒髪の揺れる、丁寧なお辞儀。おまけに字も綺麗とあっては、緊張してしまうのはクラスメート達の方だったのである。
（あ、あれ？）
向けられた、沈黙の眼差しに戸惑うメイ。
「春日さんはねー、最近までご家族の都合で海外にいたのよー？日本の学校のこととか色々わからないと思うから、みんな教えてあげてねー」
数人の女子が「……はーい」と嫌そうに答えたが、ほとんどの児童は黙ったままだ。
「じゃあ、何か質問ある人いるー？」
「お、おれ知ってるぜ！」
突然一人の男子児童が立ち上がり、メイを指差した。
「おまえ今日、べ、ベンツに乗って学校まで来ただろ！」
教室内の空気が、一瞬で凍りついた。
「ほ、ほんとうなの……？　春日さん？」
どこか掴みどころのなかった女教師までもが、今はペットショップの売れ残りケースに入ったチワワのような瞳でメイを見つめている。
「ええ。本当ですけど……」
「そ、そう……。ちちち、ちなみに、その、おいくらくらい……？」
「なにがですか？」
「も、もちろん、そのベンツの値段よ……」
「えっと、たしか二千万くらいだろうって、前に三宅さんが」
「にせっ――！」

「そんなに高くないですよね？」
メイには、金銭感覚というものが全く備わっていなかった。
この一件以来、５年３組の春日メイには、お嬢様キャラが定着してしまったのだった。

2

「学校って、難しいです……」
マンションのリビングで、三宅と一緒に食卓を囲むメイが、ぽつりとそうつぶやいた。
「どうした？　授業についていけないのか？」
まさかとは思いつつ、一応そう聞いてみる三宅。
「はい……。算数の時間で、方程式は使っちゃいけないって怒られました」
「そうか」
メイが学校でどんな毎日を送っているのか、それだけで三宅にはなんとなく予想がついてしまった。
おそらく算数の授業でのことなんて、ほんの一例にすぎないのだろう。
幼少期からアフスで大人に交じって成長してきたメイには、いまさら小学生と同じ価値観など持てないのだ。きっとクラスでも浮いているに違いない。
「友達も、いまだにできなくって」
まさしく三宅の予想していた通りだった。
「努力はしたのか？」
「しました。でもみんな、どこかよそよそしいんです……なぜでしょう？」
「さあ。なぜだろうな」
それが本人にわかれば、皆よそよそしくなどならないだろう。

「三宅さんは学生時代、友達いました？」
「……いきなりデリケートな質問をするんだな」
「す、すみません」
「いたと言えばいたし、いなかったと言えばいなかった。学生時代には、男の友人が一人いただけだったんだ」
「えと、女の人は……？」
「聞きたいか」
「は――」
「俺は話したくない。女性関係では酷い目にあった」
聞かない方がよさそうだ、とメイは察した。
「くっ……！　友人だと思っていたのに……っ！」
「……」
何があったのかについては非常に気になるところだが、メイはあえて話題を変えることにする。

第二章　友達を作ろう！　2

「そ、その男のお友達の方と三宅さんは、どうやって仲良くなったんです？」
「話してもいいが、大学での友人作りは小学生のそれとは大きく違うぞ」
「え、そうなんですか？　でも、なにかの参考にできればと思って」
「ヤツから近付いてきたんだ。？仲良くなっておけば、あとあと利用できそうだから？とか言っていたな。正直なヤツだった」
「そ、それって友達とはいえないんじゃあ……」
「そう思うか。そうなると俺は、学生時代一人も友人がいなかったということになるのだが……」
「友達ですよ！　出会いの理由はなんであれ、きっと二人は友達です！」
「……」
小学生にまで気を遣われて、逆に情けなくなる三宅。
「まあ、俺の話はともかく……。小学生の友人を作りたいのなら、まずは人気者になることだな」
言いながら、夕食のブラックシチューを口に運ぶ。
「人気者って、友達がいっぱいいる人のことを言うんじゃないんですか？」
「少し違うな。人気者とは多くの人間からの評価が高く、かつ比較的好かれている者のことだ。だが、そういった人間に友人が多いとは限らない。ちやほやされているからといって、必ずしも相手から友達だと思ってもらえているわけではないからな」
まるで自分のことのように断言する三宅。
メイはスプーンを動かす手を止めて、三宅との会話に集中していた。
「えっと、それなのに、わたしが人気者になれば友達ができると？」

「簡単な話だ。話を聞いた限りでは君の場合、そのわずかな好感すら相手に持たれていないようだからな。それどころか、むしろ嫌われていると見てまず間違いないだろう」
「えーっ！　な、なんでですかー……！？」
その反応を見て、まるで昔の自分を見ているようだ、と三宅は思った。
「俺にもわからない。だが友人の話では、他人はささいな言動でも鼻につくことがままあるようだ。……自分では、いたって普通にしているつもりなのだが」
「友達作るのって、難しいんですね……」
「だからメイ。君は学校で他人より優れているところを見せつけて、周囲の人気を勝ち取ることから始めるんだ」
「ええっ！　そ、そんな！」
驚き、困惑するメイ。
「わ、わたしには他の人よりすぐれているとこなんて、どこにもないですよっ！」
「む……。そういえば、授業について行けていないのだったな」
実際は授業の方がメイのレベルに合っていないだけなのだが、それを理解できないクラスメートの信頼を勝ち取れない以上、同じことだと三宅は判断した。
「だったら、今度は体育の授業を狙うといい。次の体育はいつだ？」
「あ、明日です。五十メートル走のタイムを計るらしくて」
「短距離か……。よし、少しだけなら本気を出すことを俺が許可しよう」
「……？」
メイはきょとんとした顔で、三宅に問い返す。
「それって、エーテルを使ってもいいってことですか？」
「いいか？　少しだけだぞ。やりすぎて地区記録を更新するようなマネはするなよ」
「でもそれって、ズルのような……」

「ズルなものか。あくまで自分の持つ本来の力を出すだけだ。少しだけな」
「うーん……。でも……」
「気が進まないのなら無理強いはしない。もともと君の問題だ。自分で考えろ」
冷たくそう言い放つと、椅子から立ち上がる三宅。
「それはそうと、さっきから箸が進んでいないな。今日のは不味かったか？」
「い、いえ！　いただきます」
少し冷めてしまったシチューを、急いで口に入れ始めるメイ。
三宅はそれを確認すると、自分の食器を重ねて、洗い台に運んで行った。
レバーを上げて、蛇口からぬるい水を出す。
「……友達ができません、か」
目を閉じて、三宅は静かな笑みを浮かべる。
「ようやく人並みの悩みを持つようになったな」
「え？　三宅さん、なにか言いました？」
「いや。ひとり言だ」
メイを学校へやったのは間違いではなかった、と三宅は思った。

第二章　友達を作ろう！　3

3

メイは、まだ悩んでいた。
（どうしよう……。本気、出しちゃおうかなぁ……）
都内にあるにもかかわらず、豊かに広げられた小学校のグラウンド。
体操着に着替えたメイは、他の児童と同じように足を折り曲げて地面に座り、自分の走る順番を待っている。
ほかの児童はみな、メイから見ると手を抜いているとしか思えないようなスピードで、息を切らしながら走っていた。こんな中でメイが本気を出せば、三宅の言う通り一気にスターになれるだろう。
（でもなぁ……）
「次は誰かな？　出席番号7番と8番の人、はやく準備してね」
物腰の弱い男性の体育教師が、座っている児童達に向かって呼びかける。
しかし、誰もスタートラインに向かう気配はない。
「出席番号7番の……春日メイさんと、8番の木之下美羽さん」
「あ、あたしなのか」
そのとき、ちょうどメイの近くに座っていた女子児童が立ち上がった。
細いリボンでふわふわの髪の毛を後ろにくくった、同性のメイから見ても可愛らしい女の子である。
「美羽ちゃん、ガンバ」
「コケるなよ～」
立ちあがっただけで、他の女子から声援が飛んだ。
「うん。適当に頑張るね」
木之下美羽はその声援に笑顔で手を振って応え、スタート位置へ

と向かう。
（いいなぁ……）
メイはその様子を、座ったままの状態でうらめしそうに眺めていた。
「7番の春日さーん。いないのー？」
そこでまた体育教師に大声で呼ばれ、ようやくメイは自分の順番でもあることに気がついた。
「あ、は、はいっ！」
あわてて立ち上がり、美羽の横に並ぶ。
声援ではなく、クスクスという嘲笑の声が送られた。

‡

「位置について、よーい」
体育教師は赤い旗を上げ、ゴール地点にいる計測係の男子児童へ視線を送る。
メイが小さく腰を落とし、スタートに備えたところで、
「気にすることないよ」
そんな小さなささやき声が、左耳のすぐ横から聞こえてきた。
「えっ？」
「スタート！」
教師の旗が下ろされ、隣の美羽は一足先に走り始める。
「あっ……！」
出遅れた。とりあえず、己の筋力のみで走るメイ。
（は、早い！）
しかし前を走る美羽に、どんどん距離を離されてしまう。
友達の多い美羽に、体育の競争でも大差で負ける――。
それが何を意味するのかは、メイにも一瞬で理解できた。
「ま、負けるもんか……！」
無意識のうちにエーテルが解放され、メイの瞳が紫色に輝き始め

る。
　これがメイの特殊な才能だ。普通の人間とは違って、小太刀のようなデバイスを仲介しなくても体内のエーテルを引き出すことができる。たまにこうやって無意識に発揮されてしまうのが困りものだが、反射的に超人的な運動能力を生みだせるのは、ＵＭＡとの戦闘をこなすエージェントとして大きな武器だった。
　――エーテルの解放により次第に加速が増し、残像が幾重にも見えるほどの速さで前に進むメイの体。
　美羽との間に開いた距離はあっという間に縮まり、ゴール手前で二人は肩を並べることになった。
「……！？」
　横を走る美羽と、他の児童たちから驚愕の目が向けられる。
　しかしメイはそれにも気づかず加速を続け、美羽よりも先に五十メートルを走り抜けてしまった。
「っと」
　急いで力を抑え、ブレーキをかける。
　振り返って計測係の男子児童を見ると、彼もまた呆けたような顔で、メイの顔をまじまじと見つめていた。
（や、やりすぎちゃったかも……）
　ついさっきまでメイの前を走っていたはずの美羽が、かなり遅れてゴールする。
「はぁっ……、はぁっ……」
　ゴール地点で立ち止まった彼女は膝に両手を当て、息を整えていた。
　汗一滴流していないメイは、おそるおそる目配せをしつつ、美羽の反応を見守る。
「か、春日さん！」
「は、はいぃっ！」
　その剣幕に、思わず後ずさり。
「あなた、速いねっ！」

美羽は額の汗を拭いながら笑顔でメイに近づくと、両手でその手をとって、軽く握りしめる。
「お、怒ってないの……？」
おどおどしながら尋ねるメイ。
「なんで怒らなきゃいけないの？」
逆に質問で返された。
「あたし、最初から思ってたの。あなたは他の人とはどこか違うなぁって。でもさっきので確信に変わったわ！」
「そ、そうかな……？」
「ねぇ。もしよかったら、あたし達、お友達にならない？」
「……っ！？」
嘘みたいな展開に、メイは言葉を失った。

第二章　友達を作ろう！　４

‡

しかし、そのやりとりには興味を示さずに、ただ二つのストップウォッチを握りしめている一人の男子児童がいた。
彼の名前は栗崎裕一＜くりさきゆういち＞。メイが転校してきたあの日に、教室で立ち上がって彼女を指差したあの少年である。
メイのタイムは、６秒７５。
それは運動だけが取り柄だった彼の記録より、ずっと早いものだった。
「ちっ……！」
裕一は、メイのタイムを計測したストップウォッチを、思いきり地面に叩きつける。
メイと美羽がその音に驚いて、裕一を振り返った。
「お勉強もできるくせに、走ってもコレかよ。どこまでイヤミな奴なんだおまえ」
裕一はメイに向かって、いかにも不機嫌そうに悪態をつく。
「なによ。ひがんでるの？」
美羽が笑いながら間に入ったが、裕一の憎まれ口は終わらない。
「いいよな〜、金持ちは！」
「はぁ？」
「どうせオヤジもオフクロも、どっかの大企業の社長か何かなんだろ？　生まれたときから恵まれてっから、そんなに何でもできるようになるんだ。要するにより、おれ達とは違うんだよなぁ〜！　人種ってやつがよっ！」
「っ……！」
ショックを受けるメイ。
「ば、ばっかじゃないのアンタ！？」

その横から、美羽が裕一に対し非難の声を贈った。
「だってそうとしか思えねーじゃん！　……春日、正直に言ってみろよ。大金積んで秘密の特訓でもしてたんだろ？　どこまでも卑怯な――――ぶっ！！」
そこで裕一の口をふさいだのは、美羽の放った強烈なビンタである。
「いいかげんにしなさいよ！」
鋭い目で裕一をにらんで、美羽は大声で怒鳴りつける。
「親がどうとか、人種がどうとか、そんなの関係ないじゃない！」
それから彼の胸ぐらをつかみ、力強く引き寄せた。
「たとえアンタの言うように、この子が生まれつき人より恵まれていたとしてもねっ、そのぶんだけ苦労もしてんのよ！　こんな子が普通に生きるのがどんなに難しいのか、アンタは知ろうとしたことすらないんでしょう！　どうせないんでしょうねっ！！」
「な、何言ってんだよ、おまえ――」
「ふんっ！　さっきのでわかったわ！」
裕一の言葉をすべて遮る勢いで、美羽はまくしたてる。
「なんか他の子の反応がおかしいなとは思ってたけど、この子ハブにしてイジメてるのってアンタでしょ！？　男のくせに……！　やることがみみっちいのよ！」
「な――っ！」
「え？　わたしイジメられてたんですか？」
まったく気がついていなかったメイは、一人だけきょとんと目を丸くしていた。
「ち、違げぇよバカ！」
「なにが違うのよ！」
「い、いや、その……」
口ごもる裕一。彼自身、美羽にそう勘違いされる心当たりが無いわけでもない。
しかし、このまま春日メイイジメの主犯扱いにされるのは御免で

ある。
「な、なんかこいつ、絡みづらいんだよ！」
だからメイ本人も見ている前ではあるが、裕一は意を決してその内心をぶちまけることにした。

第二章　友達を作ろう！　5

「授業では大人みたいに難しい言葉ばっか使いやがるし、給食とか昼休憩の時間も、一人で全然平気そうでさっ！　金持ちで、美人で、なんか近付いちゃいけません的なオーラが出てんだよ！　オーラが！　みんなそう思ってんだ！」

「……」

胸ぐらからパッと離される、美羽の握りこぶし。

「ほー。てことは、アンタも美人だと思うんだ」

先程までの怒りはよそに、美羽は裕一に対して興味深そうな表情を向け始めていた。

「び、美人なんて言ったかおれ？」

「言った」

「し、しまった……！」

顔を隠して上ずった声でつぶやくが、美羽にもメイにも丸聞こえである。

「仲良くしたいなら仲良くしたいと、はっきり言えばいいのに……」

ねぇ？　と美羽はメイに向けて、裕一を嘲笑するような笑みを浮かべる。

「だ、だれがこんなイヤミ女と！」

「顔が真っ赤よ」

「今日は暑いんだよ！」

「春日さんはアンタみたいなのでも仲良くしたい思ってるのに。でしょ？」

「は、はい」

突然話を向けられたメイは、戸惑いながらも即答する。

「できればそうしてもらいたいなって、ずっと……」

「くっ！」

メイに哀しそうな視線を向けられ、動揺する裕一。

「ていうかさ、興味があるからさっきあんなに怒ってたんじゃないの？　どうでもいいなら普通距離をとるわ。自分で気づいてないかもしれないけど、アンタこの子のこと」
「う、うるせぇ！　それ以上言うなっ！」
その反応は、ほとんど自白しているようなものだった。
「……あ、ああそう」
必死な裕一にさすがの美羽も悪いと思ったのか、そこで話を元に戻す。
「まぁともかく、そういうことならさっさと謝んなさい？　このままだと絶対に春日さん、アンタにものすごく嫌われてると思い込んだままになると思うから」
「ぐ――」
奥歯を噛みしめる。
「たしかにすげえニブそうだからな……こいつ」
「？」
話が見えてこないメイは、頭の上に大きな疑問符を浮かべつつ、笑顔でその場に立ち尽くしていた。
「……わ、悪かった」
「聞こえないわ」
「あークソッ！　わかったよ！」
仏頂面でメイの目の前まで歩み寄り、頭を深々と下げる裕一。
「さっきは言いすぎた！　ごめん！」
「え？　あ、はい」
別に怒ってないのにな、ズルしたのは本当だし。
……などと内心で思いながらも、そこは素直に謝罪に応じるメイ。
「あ、あの、たしか、栗崎くん……ですよね？」
「ああ。栗崎だよ。栗崎裕一」
「え、えっと、もしよかったら、わたしとお友達になってくれませんか？」
「な、なにぃ！？」

メイの提案に、裕一は面食らったような顔をする。
「わたし、同年代の子とこんなにお話ししたのって、木之下さんと栗崎くんがはじめてなんです。木之下さんとは友達になれたから、今度は栗崎くんと、って思って」
「な、なんだよそれ……？　おれらはお話しじゃなくてケンカしてたんだぞ！？」
「いいじゃん。せっかく春日さんの方から誘ってくれてるのよ？　これ以上ないチャンスってもんよ」
「だからそんなんじゃねぇっつーの！」
「栗崎くん」
不安そうな視線を裕一に向けるメイ。
「ダメ……ですか？」
やっぱり断られるのではないか、などと心配しているのだ。
「ぐ」
裕一は耐えきれずに目を逸らす。
この男は尻に敷かれるタイプだな、と美羽はこっそり彼の将来を案じた。
「いいか、春日……！　これはケジメだ！」
「は、はぁ」
「迷惑かけたケジメとして、おまえの友達になってやる！　男だからな！」
「あ、はい。ありがとうございます！」
満面の笑顔を浮かべるメイ。

「おーい、もう次の人走ってもいいかー？」
向こうで体育教師が手を振っていることに、誰も気づいてはいなかった。

第二章　友達を作ろう！　6

4

体育の授業が終わり、更衣室で雑談の華を咲かせるメイと美羽。
美羽と一緒にいることで周囲の女子から好奇の視線を向けられているが、メイはそれに気づかず、美羽は気にしないで着替えを続けている。
「あ、あの……。木之下さんって」
「美羽でいいよ。みんなそう呼んでるでしょ？」
「は、はい」
「ついでにその肩っ苦しい言葉遣いも禁止ね？　友達なんだからさ」
「う、うん」
気恥ずかしく感じつつも、言われた通りにするメイ。
「で、何を言いかけたの？　めーちん」
「めーちん！？」
「だって、春日さん下の名前？メイ？なんでしょ？　だからめーちん」
「いや、いくらなんでもそれは……」
「なんで？　可愛いからいーじゃん！　あ、でもあたしのことは？みーちん？とか？みうちん？とか呼ばないでね。恥ずかしいから」
「ふ、不公平だよ！」
「だってキャラじゃないもん。みーちんだなんて」
「わたしだって、めーちんだなんて呼ばれたことないよ！」
「じゃあ今日からあたしが呼んであげるね！」
何を言っても、美羽に上手を取られてしまう。
「はぁ……。もういいや」
諦めて、話を進めることにした。
「それで、み、美羽ちゃんは、どうしてわたしとお友達になってく

れたの？」
「――仲間だから」
「なかま？」
「そう、仲間。気が合いそうだしね」
「そうかなぁ……？　性格とかぜんぜん違う気がするけど」
「だからいいんじゃないの？　自分と同じ顔の人はこの世にいてもいいけれど、自分と同じ性格の人なんて絶対イヤ。だからあたしも、性格だけは人の真似をしないようにしてるの。パパやママは違う考えみたいだけどさ」
　あまりよくわからない喩えだった。
「あ、そうだめーちん。たしか明日は土曜よね？　よかったら、今夜ウチに泊まりに来ない？」
「へ？」
　メイは耳を疑う。
「お、お泊まり……！？」
「そう。あたしが学校で親友を作ったって、ちゃんとパパやママに紹介したいの。まあ、めーちんがイヤだってんなら、べつにいいんだけど」
「そ、そんなことないけど……」
　メイは戸惑う。
「わたしなんかで、本当にいいの？　美羽ちゃんは他にも友達、いっぱいいるのに」
「だってあれは、あたしが作った友達じゃないもん。それに、さすがにあの子たちを家には呼べないよ」
「……？」
　美羽は笑うが、メイには彼女の言っている意味がよくわからない。
　どこか話が噛み合っていないような気さえする。
「それで、どうかな？　急な話で悪いけど、今夜来られる？」
「えっと……」
　考えをめぐらすメイ。

友達ができただけでも大進歩なのに、いきなり相手の家にお呼ばれするだなんて自分にはハードルが高すぎるのだ。
ボロが出てもいけないし、ここは丁重に断わっておいたほうがいいだろう。
「……多分ダメかな。いちおう、三宅さんに聞いてみるけど」
着替えの制服から、携帯電話を取り出すメイ。
ボタンを操作してリダイアルの一覧画面を表示させる。

『三宅さん』『三宅さん』『三宅さん』『三宅さん』『三宅さん』『三宅さん』『三宅さん』

見事に三宅咲麻、一色だった。
「な、なにコレ……。『三宅さん』って、めーちんの彼氏？」
横から覗き込んだ美羽が若干引きつつ、メイに尋ねる。
「ちっ、違うよっ！　三宅さんはわたしの――」
言いかけて、メイは言葉に困ってしまう。
？パートナー？というのは執行官とエージェントとしての関係だし、単なる？保護者？というのもどこか違う。？お兄ちゃん？。絶対違う。
「家族だよ。大切な人」
考えを巡らせているうちに、無意識にメイの口から出てきたのがその言葉だった。
「ふ～ん。家族なのに苗字違うんだ」
「うん。わたし、お父さんもお母さんもいないから」
「え……？」
「あんまり覚えてないんだけど、小さい頃に二人とも死んじゃったって三宅さん言ってた。他に引き取り手のなかったわたしを、まだ独身なのに三宅さんが引き取って育ててくれたんだって。これを教えてくれたのは三宅さんの、たぶんお友達の有沢さん」
「そ、そうだったの」

返す言葉を失って、沈黙を生んでしまう美羽。
「複雑なのね」
ようやくそれだけ切り返した。
「あはは……」
笑ってごまかすメイ。
「待ってて。三宅さんに聞いてみるから」
そう言いながら、通常回線の番号をコールする。

第二章　友達を作ろう！　7

5

胸元で携帯電話が振動し、無機質な機械音が三宅に電話の着信を教えた。
「俺だ。どうした」
メイの名前を確認してから、彼は通話ボタンを押した。
『お仕事中すみません。三宅さん』
「いや、いい。だが用件は簡潔にな」
『はい。あの……、今日、お友達の家に泊まってもいいでしょうか？』
「な――」
絶句する三宅。
「い、今、なんと言った？」
『で、ですから、お友達の家に――』
「もう友人ができたのか！？」
『は、はい。おかげさまで』
えへへ、と回線の向こう側で、はにかむような笑い声。
「は、早いな……。昨夜の作戦を実行したのか」
『はい。三宅さんの予想してた流れとは、ちょっと違う気がしますけど』
「そうか……。メイにも転校して一週間で友人ができたか。なのに、なぜ俺には――」
『み、三宅さん？』
「何でもない。それで、俺に何の用なんだ」
『外泊許可がほしいんです。三宅さん抜きでは初めてですけど、その、美羽ちゃん……あ、美羽ちゃんっていうのがお友達の名前で、

その子がウチに泊まりに来ないかって言ってくれて――』
「よかったじゃないか！　是非行ってくるといい！」
『そうですよね、ダメですよね……。って、え？　いいんですか？』
「ああ。滅多にない機会だからな。本部には俺が書類を出しておこう。――住所はどこだ？　あとで着替えの荷物を持って行くからメールしてくれ」
『い、いいですよ。そこまでしてくださらなくても』
「遠慮するな。学校が終わってから一緒に帰るといいだろう」
『は、はい』
「仕事中だから、もう切るぞ」
『あの、三宅さん』
「なんだ」
『ありがとう、ございます。喜んでくれて』
「ああ」
携帯電話を閉じる三宅。

「さて」
身をひるがえし、直前まで話していた相手に向き直る。
「お待たせしました」
「いえ、それはいいんですが……」
会話の内容を半分だけ聞いていた中年の刑事は、なんとも言えない表情で苦笑いを浮かべている。
「娘さんですか？　私にも中学生になる娘がいましてねぇ、もう反抗期で困ってまして」
「違います。俺が十歳の娘がいるような歳に見えますか」
ものすごく真剣な表情でにらまれ、一瞬だけ呼吸が止まりそうになる刑事。
若いけど見えなくもないと正直に答えたら、どうなってしまうのだろう。
「失礼」

大人げないことをしたと、三宅は心の中で反省する。
「遺体はまだ、現場ですか？」
「え、ええ。そうです。ご覧になりますか」
「拝見します」
「余計な心配かもしれませんが、見ない方がいいと思いますよ。ウチの若いモンは我慢しきれず、その場で全員吐きましたから」
「構いません。慣れています」
「では……」
刑事は三宅を連れて、キープアウトのテープを張られたそのまた奥へ向かう。

6

二人が立っているのは、高く澄みわたる青空の下。
都内の沿岸部にある埠頭の、人気のない立ち入り禁止区域だった。
三宅の住むマンションからもそう遠くなく、メイの通う小学校からは徒歩三十分もあれば着くだろうという距離にある。
「第一発見者は、日頃からよくこの港を利用していた釣り人です。……いや、本当の第一発見者はカラスかな」
「カラス？」
そう口にしたものの、三宅はすぐに事情を察した。
「ああ、成程」
「釣り人が二日ぶりにこの港へ釣りへやってきたところ、ある一画にものすごい数のカラスが集まっていたそうです。これは怪しいぞと思って立ち入り禁止の柵を乗り越え、現場に近寄ってみたら……」
「全身の皮という皮を剥かれた死体が転がっていたんですね。――それも、三体も」
「そうです。その釣り人はひどいショックを受け、もう港には近づきたくないと言っていました。近々カウンセリングを受ける予定だそうです」
「そうですか」
「遺体が発見されたのは、ここです」
刑事が立ち止まる。

埠頭にある、入り組んだ構造の資材置き場の裏。
血痕だらけのコンクリートの上に、三つのブルーシートが広げられていた。

周囲では何人もの鑑識官が、各々に割り当てられた調査を続けている。
「あまりにひどい状態だったんで、検死も搬送も後回しにして、すぐにアフスへ連絡を入れました。長年の経験からこっちも段々とわかってきたんでね」
しかめっ面を浮かべ、シートを見下ろす刑事。
「失礼」
その一枚を、三宅はまるで躊躇する様子もなくめくってみせた。
「ああ……、これは……そうですね、トラウマにもなるでしょう」
「その仏さんは、おそらく小学生くらいの女の子だということがわかっています。骨格がまだ未熟ですし、ぐちゃぐちゃになった××に紛れて、小さな××が発見されました」
「……」
「あっちの二人は、三十代から四十代くらいの男女。まぁ順当に考えたところ、その子の両親でしょうねぇ。家族で外に出歩いていたところを、事件に巻き込まれたんでしょう」
「死亡推定時刻はわかりますか？」
シートから離れ、刑事に問いかける三宅。
「さんざん荒らされてはいますが、検死官の話によると、××がまだ新鮮らしいんですよねぇ。ですから、死亡推定時刻は昨日の夜から今朝にかけてだろうと思われています。状態が状態ですから、検死にまわさなければ詳しいことは何もわかりませんが」
「被害者の身元は？」
「現場には今のところ、遺留品の類いは何一つ発見されてません。それこそ着ていた衣服の一着も。歯の治療痕もまるで判別できない状態にされています。警察にガイシャのＤＮＡ標本でも残っていない限り、身元の特定は完全に不可能でしょうな」
「やはり……」
「どうです？　執行官さん、これはヤツらの仕業なんでしょう？」
「そうですね」

周囲を見回す。
「現場には、私にもわかるくらい大量のエーテルが残っています。このやり方にも心当たりがありますし、まず間違いないでしょう」
三宅は慣れた手つきで胸ポケットから手帳を取り出し、現場の警察関係者全員に向けて宣言した。
「これは、ＵＭＡによる殺人です。以降の指揮権は、すべて我々アフスに引き継がれます」

ビューティフル・ホーム　1

1

美羽の自宅は学校を裏手側に十数分歩いたところにある、人通りのない住宅団地の中にあった。メイの基準で見るとお世辞にも大きな家とは言えなかったが、一般的には立派な都内の白い一軒家だ。
中に住むのは、サラリーマンの夫、専業主婦の妻、そして小学生の娘。
それは誰から見ても申し分のない、幸せな家庭だった。

‡

「あら、おかえりなさい美羽」
「ただいま。ママ」
美羽が玄関のインターフォンを押すと、すぐに母親が迎えてくれる。
見るからにまだ若く、スレンダーな美人。美羽がもう少し大人になったらこう育つのだろうという、見本のような女性だった。
「あらあら、そちらのお人形さんみたいな子はだあれ？」
「あたしのお友達よ。名前はめーちん」
「かっ、春日、めいデすっ……！」
緊張して声が出ないうえ、舌を噛む。
「そんなに緊張しなくていいのよ？　めーちん？」
「ダメよママ。めーちんって呼んでいいのはあたしだけなんだから」
「あらあら、美羽ちゃんお気に入りなのね？　うふふ、うらやましいわ」
最初からずっとメイの前で目を細めて、笑顔のままでいる美羽の

母親。
「ねぇママ。今夜この子、うちに泊まってもいいでしょ？」
「えぇ？　泊まっていくのぉ？」
笑顔を絶やさない彼女も、少しだけ困ったように眉をしかめた。
「う～ん、そうねぇ……」
玄関先でしゃがみ込む。
「ねぇ、メイちゃん。ちょっとこっち見てくれる？」
そう言って、メイの顔をまじまじと覗き込むと、戸惑うメイに視線を定め、美羽の母親は唐突に細い目を見開いた。
異常なほど黒目がちな瞳が、一瞬だけまぶたの奥からのぞく。
「っ……！！」
まるで爬虫類のようだった。
突然の変化に驚き、その場に立ちすくんでしまうメイ。
「うん。この子なら大丈夫！」
しかし美羽の母親は嬉しそうに目を細めて、嬉しそうに声を弾ませた。
「美羽ちゃんもお友達の選び方、だいぶわかるようになってきたわね」
「でしょ？　前みたいなことは、もうこりごりだもん」
「うふふ、そうね」
「……？」
母子だけの会話に、まるでついて行けないメイ。
「よしよし。いい子ね」
美羽の肩に手を置き、ポンと叩く母親。
二人とも、心から幸せそうだった。
――アフスから離れた場所にある、わたしだけの幸せ……。
いつぞやの、三宅の言葉を思い出す。
――美羽ちゃんはそれ、もう見つけてるのかな……？
なぜかふと、そんなことを思った。

‡

そのまま美羽の部屋で何時間か過ごし、夕食に招かれたメイは、美羽の母親が作った料理を見事に完食してみせた。
「ハンバーグだったなんて、ラッキーだったね。めーちん」
「うん。すごく美味しかった！」
「でしょ～？　ママは肉料理が得意なの。そこらのレストランよりも、ぜんぜん美味しいのよ？」
「大したことないわよぅ。生地に水とバターをちょっと足してるだけなんだから」
「いいえ、そんなことないですよ。レストランよりも美味しかったですもん」
もうすっかり打ち解けたメイも、上機嫌で会話に参加している。
「あっ……、でも、お魚じゃなかったのかな……？」
思い出したかのように、ひとり言を口にするメイ。
「お魚？」
「あ、えっと、この家に入ったとき、少しだけお魚のにおいがしたから。わたし晩ごはんはお魚だと、勝手に思いこんじゃってて」
「そうなの？　ママ、お魚買った？」
「いいえー？　買ってないわよぅ？」
「じゃ、じゃあ気のせいかな……？　なんだかすみません」
下手をすると失礼な意味に取られかねないと思い、本気で謝るメイ。
「いいのよ、気にしないで。他人の家は独特のにおいがするものだから。その感覚、とってもよくわかるわぁ」
美羽の母はそれを察したうえで、うふふと穏やかに微笑んだ。
「……」
美羽の父はというと、同じ食卓の、心なしか離れたところで黙って茶をすすっている。
メイとは最初に軽く挨拶をしただけで、以降はずっと無口を貫い

ていた。だがこちらのやりとりには、しっかりと耳を傾けているようだ。
「あの――、やっぱりわたし、迷惑だったんじゃないでしょうか？」
その無愛想な態度にだんだんと不安になるメイは、美羽の父親にだけ聞こえないような小声でそう尋ねた。
「あの人、会社での自分の扱いが相当悪かったみたいでねぇ、今日は落ち込んでるのよ。いつものことだから気にしないで」
母親が同じく小声で、そう説明してくれる。
「そーなんだ。パパかわいそー！」
美羽があんまり心のこもってない声でそう言って、一人で笑っていた。

2

やがて夜も深くなると、約束通り三宅が荷物を届けに来てくれた。
「すまない、遅くなった。……む」
メイの寝間着などを届けに来た三宅だが、それを玄関先で出迎えたメイはすでに入浴を済まし、美羽のパジャマを借りて床（とこ）に就こうという間際だったのである。
「やはり遅すぎたか。すまない」
「いえ、歯ブラシとか無かったんで、助かります。……三宅さん、また残業ですか？」
やつれた様子の三宅を見て、メイはねぎらいの声をかけようとした。
「ああ。急な事件があってな。おそらく今日は徹夜だ」
「事件……。任務ですか？」
「いや、まだ君が気にするような段階じゃない。それよりも、今日はゆっくり楽しんでくれ」
「……。わかりました」
こんな状態なのに、まだ三宅に気を遣われている。
自分はまだ、彼を手伝うには程遠いのかもしれない。
メイは、それを心のどこかでさみしく感じた。
「あまり無理をしないでください――って言っても、三宅さんはするんですよね？」
「無論だ。無理をしなければ仕事が終わらないからな」
「じゃあせめて、ちゃんとごはん食べてくださいね」
メイが笑いかけ、三宅は、ふ、と鼻を鳴らす。
「ああ。わかった」

そう言うと、彼はそのままメルセデスに乗り込んで、夜の住宅街を高級車特有の静かなエンジン音で駆け抜けて行った。

その影が見えなくなるまで、玄関の外で見送っていたメイ。

「ふぇー、驚いたわ！」

そこに突然、庭側の窓が開き、同じくパジャマ姿の美羽が顔をのぞかせた。

「み、美羽ちゃん！」

びっくりして、思わずのけぞる。

「例の三宅さんって、思ってたよりずっと若いんだね」

「き、聞いてた……？」

「うん」

ちっとも悪びれることなく、美羽はうなずく。

「小さく窓開けて立ち聞きしてたし、電気消してカーテンの隙間から盗み見してた」

「……よくないと思うよ？　そういうの」

「いいじゃん。あの人は気づいてたみたいだし」

「え？　そうなの？」

「うん。一度だけ目があったもん。殺されるかと思った」

三宅は慣れないと目つきが怖いのだ。

「？せめて……！　ちゃんとごはんたべてくださいね……！？」

「も、もうっ！　やめてよそういうの！」

「めーちんって、あの人のこと好きなの？」

急に図星を突かれ、苦笑いを浮かべるメイ。

「な、なんでそういうこと聞くの？」

「あの人と一緒に住んでるんだよね」

「そ、そうだけど……」

家族だと言ってあるのだから、怪しまれる要素などないはずだ。

「あの人、ただ者じゃない感じはするけど、所詮は人間でしょ？学校で普通の子と仲良くしたいって気持ちはあたしにもわかるけど

さ、家でまで一緒にいるなんて、ちょっと信じらんないかな」
「……？」
美羽の言わんとすることが、メイにはまるで読みとれなかった。
「一緒にいて、なんか疲れない？」
「え？　ぜんぜんそんなことないよ？」
三宅の存在は、むしろメイに元気をくれる。
「ふーん。やっぱりあなた、変わってるわ」
何を考えているのか読みとれない表情で、美羽はそうつぶやいた。
『美羽ちゃーん？　メイちゃーん？』
ちょうどそのとき、家の中から美羽の母親の呼ぶ声がした。
『あんまり外にいると、あっという間に湯ざめしちゃうわよー？
はやくお布団に入って寝なさーい』
「はぁーい！」
話を中断して、大声でそれに応える美羽。
「……さ、もう寝よ？」
美羽はメイを中に誘う素振りを見せると、窓を閉めて鍵をかけた。

3

翌朝、枕もとに置かれた携帯電話が発する着信音を受け、メイは夢の中から引きずり起こされる。曲名はモーツァルトのメヌエット。メイの持つ端末にプリインストールされているものの中で、三宅が最も気に入っていた一曲である。

「ん……」

寝ぼけ眼で手を伸ばし、携帯電話を掴むメイ。

時刻はまだ朝の六時だったが、三宅からの連絡だとわかっているので嫌な気はしない。

「もしもし……三宅さん？」

『メイ。任務だ』

そのひと言で、メイの頭は冷や水をかけられたように目覚めた。

半分とじていた瞳も、大きく見開く。

「それって、昨日三宅さんが言ってたやつですよね？」

『そうだ。今から迎えに行くから準備しておいてくれ。詳しいことは車の中で話す』

「わかりました」

言うが早いか、三宅の側から終話ボタンが押された。

「……どうしたのぉ？」

ベッドの上で目をこする美羽が、帰り支度を始めるメイに問いかけてきた。

「えっと、用事があるからすぐに帰って来なさいって」

メイは枕もとに置いていたピエログマの腕時計を身につけながら、困ったような笑みを浮かべて、彼女に詫びる。

アフスに関することは機密事項が多く、容易には口にできないのである。
「ごめんね。わたし、もう帰るね」
「ああ……三宅さんから？」
「うん」
「そっか……バイバイ。あたしはもうちょっと寝るわ……」
ボサボサの頭で投げやりにそう言って、枕へ顔から倒れ込む美羽。
どうやら朝にはあまり強くないらしい。
「うん。また明日、学校でね」
「ふぁ～い」
制服に着替えを始めながらメイがそういうと、美羽は重たい手を上げてそれに応えた。

4

「外泊中だというのに、急に呼び出してしまってすまない」
「いいんです！　わたしエージェントになってからというもの、この日をずっと待ってましたから！」
まだ朝も早いが、やる気は充分のメイ。
一方、三宅の目の下にはうっすらと、くまのようなものができている。
「三宅さん、昨日は徹夜ですか？」
「いや。今日のことを考えて仮眠室で寝たよ。二時間だけな」
「そ、そうですか。大変ですね」
今も爆睡しているであろう美羽のことを考えると、可哀相になってくる。
「それで、三宅さん……。事件って、何があったんですか？」
「殺人だ」
「――っ！」
あらかじめ覚悟していた中で、最悪の返答だった。

やがては関わるであろう事件だと思っていたが、心の準備がまだ足りていない。それでもメイは三宅の引っ張らないよう、努めて平然として答えた。
「殺人……。事故ではないんですね？」
「現場の状況から考えて、目標は人気のない時間と場所を選んで犯行に及んだと見て間違いない。遺体の状態も、通常の動物型ＵＭＡによる損壊ではまず考えられないものだ」
「……じゃあ、人型のＵＭＡ、ですか？」
制服の裾を握りしめるメイ。
殺人事件に、人型ＵＭＡ。どちらもメイには馴染みが無い。考えてみれば、これまでに彼女が受けた戦闘訓練では、人型のＵＭＡは一度も登場したことがなかった。
「そう緊張しなくても大丈夫だ。人型はどれも知能が高く、命がけで抵抗してくることは滅多にない。それに現時点での俺達の任務はＵＭＡの駆除ではなく、その足取りの捜査、それから逮捕・勾留までだからな。そのあとは特定裁判所の方で片をつけてくれる」
「まだ捜査段階なのに、なぜわたしを？」
「それは現場に行ってみればわかる。――そうだ、さすがに小学校の制服であそこへ入るのはまずいな。後ろに上着を持ってきているから、上だけでも着替えておけ」

‡

そして、美羽の家から、わずか十数分ほど走ったところ。
「着いたぞ」
三宅の車がアフスの封鎖を乗り越えて、遺体発見現場である港の駐車場へ停められた。
言われた通り制服の上着を脱ぎ、後部座席にあった赤い外套へ着替えたメイ。
「……！」
ドアを開けて一歩外へ出た瞬間、強風が彼女を襲う。
「風が強いですね」
メイははだけてしまった外套の逆向きファスナーを、一番下まで締めることにした。
「今朝の未明から、都心部に台風が近づいているんだ」
三宅がメイを急いで呼び出したのは、まさにその台風が理由だった。
「わたしは何をすればいいんですか？」
「急いで君に頼みたいのは、まずは現場に残されたエーテル残滓の追跡だな。嵐が過ぎ去る明後日以降では遅すぎるんだ。今でさえかなり風に流されてしまって、観測機での追跡は困難になってしまっている」
「なるほど」
だから機械よりも数段精度の高い、メイの超感覚で捜査を続けることになったのである。
「メイ」
鋭い目つきで、メイに呼びかける三宅。

「実際の犯行現場はこの向こうだ。――決して近づくな」
遺体はもう搬送し終えているが、見ないに越したことはない。
「は、はい」
厳しい表情の三宅を見て、メイはまるで叱られた子供のように返事をした。
「始めてくれ」
「はい」
三宅に促され、エーテルを解放するメイ。
瞳が紫色に染まり、五感が研ぎ澄まされていく。

ＵＭＡについて、人類が唯一把握している最初にして最大の発見。
それはその細胞が例外なくミネラルを持たないという、生物学的な特徴だった。
人間や他の動物、植物などの生物は、ミネラル体・エーテル体・アストラル体をすべて保有し、それらがお互いに干渉しあうことで細胞を構築している。
しかしＵＭＡの細胞にはミネラル体が存在せず、その代わり、他の生命体とは比べ物にならないくらい純度の高いエーテル体で構成されている。
ミネラルはエーテルの活動を抑える働きをもつため、普段は生物の持つエーテルは活動を停止し、空気中に漏れだすことはありえない。
だがＵＭＡのエーテルは歯止めとなるものを持たないため、本人の意思とは無関係に空気中に自分のエーテルを撒き散らしてしまう――メイが五感を働かせて捉えようとしているのは、そんな理由で犯人が現場に残したエーテルの残り香だった。

「たしかに、目標のものと思われるエーテルがありますね」
それはメイが「近付くな」と言われた現場付近を中心に、周囲に向けて散漫している。

「でも……無理です。たどれません」
「なぜだ？」
「これ、たぶん観測機のせいでも台風のせいでもありませんよ」
不可解かつ困ったような顔をしながら、メイは三宅を振り返る。
「エーテル残滓が――その、犯行現場で急に出てきて、急に消えてるんです。風でかき消えてるような感じじゃなくて、最初から現場にしか犯人の足跡が無かったみたいに」
「ふむ。やはりそうか」
三宅はあごに手を当てて、表情一つ変えずにそう言った。
「へ？」
その反応に、メイは拍子ぬける。
「やはりそうかって……最初からわかってたんですか？」
「まあ、遺体の状態からある程度予想はできていた」
「……わたしにはさっぱりですけど」
「擬態だよ」
「擬態？」
ごく最近、同じ言葉を使った記憶がある気がした。
専門的な意味では、ＵＭＡが人間になりすますことを指すのだが……。
「あ、あのお馬さんの」
そこでメイは、卒業試験で撃破したダークホースを思い出した。
「あんなものとはわけが違うぞ。今回の目標が使っているのは、おそらく考えうる限りで最も効果の高い方法だ。完璧と言い換えてもいい」
「？」
「すぐにわかるさ」
もう謎を解いているはずだが、三宅はなぜかいっそう険しい表情を浮かべている。
「それを確認するために、君にもう一つお願いがあるんだが」
「は、はい！　なんでしょう」

姿勢を正して、三宅に向き直るメイ。
「わたしにできることなら、なんでもします！」
三宅からの？お願い？とあっては、メイのやる気が出ないわけがない。
爛々と紫の目を輝かせるメイを見て、しかし三宅は困ったような顔をした。
「いや……少々、頼みづらい部類の願いでな。そう喜ばれると気が引ける」
「大丈夫ですってば。遠慮しないで、じゃんじゃん言ってください！」
「死体の臭いを追ってくれ」
「……え」

4

「……すまんな」
現場から遠く離れた場所。
生臭い香りをたどりながら、二人は道路をひたすらに歩いている。
グロッキーなテンションになりつつも捜査を続けるメイを、後ろから三宅が気遣った。
「まだ、辿れるか？」
「わたしの胃袋がもてば……」
吐きそうになるメイ。
「……すまん」
「――いえ。それより変です、三宅さん。これって被害者のニオイなんですよね？　ニオイがこんなにずっと続いてるってことは、死体が移動してるってことですか？」
「正確には死体そのものではなく、死体の皮が移動しているのだろう。中身はもう車で搬送されているからな」
「……かわ」
「あまり深く考えるな」
「もう考えちゃいましたよ……」
うぷっ、と口を塞いで吐き気を抑える。
「あえて君には伝えなかったが、もう隠すことは不可能だから言うぞ。今回の被害者の遺体は三つ。三十代の男女二人と、十代の少女が一人だ。全員、全身の皮膚が完全に切り取られ、筋組織や臓器のみが現場に残された状態だった。無残なものだよ」
「う……」
再び吐き気をもよおしているメイに気づかぬふりで、三宅は話を

続ける。
「ＵＭＡの足跡とも言えるエーテル残滓が現場にしか残っていなかったのは、彼らが足跡のつかない靴を履いて現場に現れ、そこで一度靴を脱ぎ、他の靴へ履き替えたためだ」
　エーテルの残り香を隠す靴。それはすなわち、生命の持つミネラル体に他ならない。
「この場合の靴とは――」
「……もういいです。言わないでください」
　涙目になるメイ。
「そうか」
　メイが理解していることを察し、三宅は詳しい説明を避けた。
「今回の目標ＵＭＡは普段、文字通り人の皮を被って生活し、アフスの追跡を免れていると見て間違いない。現場に履いてきた靴――それが現場に残されていなかったのは、目標のＵＭＡが用済みとして食したか、もともと痕跡を残さぬように消失する仕組みにでもなっているのだろう。つまり……おっと」
　話に夢中で、三宅は突然立ち止まったメイにぶつかりそうになる。
「……三宅さん」
「どうした？」
「わたし、これと同じニオイを嗅いだことがあります。それもつい最近」
　足を止め、住宅街の道路をじっと見つめているメイ。
「本当か！？　どこだ？」
「……言いたく……ありません」
　風に流されそうなくらい小さな声で、ぽつりと、メイはそうつぶやく。
「重要なことなんだ。人の命がかかっている」
　三宅は諭すように言った。
「人間社会に溶け込んだ彼らは、しばらくは大人しく生活していることだろう。しかしいつまでもそうしてなどいない。絶対に、仮面

をはりかえる時期が来る。そのとき被害に遭うのは、また別の罪のない人々だ。それでもいいのか？」
「……」
メイは思い詰めた表情のまま、一向に返事をしなかった。
「そのうちに被害者から奪ったミネラルが彼らの体に馴染み、生きている人間とまったく区別がつかなくなる。目標を特定し、次の事件を未然に防げるチャンスは今しかないんだ」
「で、でも、そんな……っ！」
顔を上げ、三宅を見るメイ。
その顔は、今にも泣きそうになっている。
「ど、どうしたというんだ！？」
面食らって、三宅はその両肩にふれる。
「まさか――」
あわてて、三宅は周囲を見回した。
わずかに見覚えのある景色だ。
人気の少ない、閑静な住宅団地。やや離れた場所には、住宅のかげに隠れて、メイの通う小学校の建物が頭をのぞかせている。
そして二人の向かう先には、一軒の白い家があった。

「あら？　どうしたの？」
そのドアを開け、中から現れた少女は、メイを見て親しげに呼びかける。
「何かうちに忘れ物？　めーちんてば、ドジっ子なんだから」
木之下美羽はそう言って、嬉しそうに笑った。

5

そして、明くる日の日曜日。
仕事から帰宅した三宅は、まっさきにメイの部屋のドアをノックした。
「結果が出たぞ」
返事はない。
鍵はかかっていないが、かといって無断で中に入るほど、三宅も無粋ではなかった。
ひとつだけ溜め息をついて、ドア越しに話を続けることにする。
「木之下美羽の頭髪から採取したＤＮＡは、被害者のものと完全に一致したそうだ。事件のあった当日、一家が仲良く現場付近のレストランに出かけていたことも、警視庁の調査で裏付けがとれている」
「……そうですか」
ようやく中から声が聞こえた。
――重症だ。
三宅はその声色から一瞬で察するが、このまま何も伝えないわけにもいかない。
「今あの家に住んでいるのは、木之下夫妻とその娘ではない。ドッペリオルという、固有のＤＮＡを持たない人型ＵＭＡだ。本物の彼らは、三日前にあの波止場で死んでいる」
三日前……と、それを聞いたメイは心の中で反芻した。
メイが美羽と友達になったのは、たしか、つい二日前のことだった。でもあんなに仲良くなった人は他にいないから、もうずっと前のことのような気がする。
三宅の話が本当なら、美羽は――メイが美羽だと思っていた人物

は、木之下美羽になりすまして見知らぬ学校へやってきた、人殺しのＵＭＡだったということになる。
ふと、あの日の体育の授業を思い出す。
そういえば――初めて肩を並べたあのとき、美羽は自分の出席番号を忘れていた。
「美羽ちゃんはっ！」
頭に浮かんだ考えを否定しようと、メイはつい語調を強めてしまう。
そして口から出てきた自分の声の大きさに、驚く。
「……美羽ちゃんは、普通の女の子なんです。人を殺すＵＭＡなんかじゃ、ありません。美羽ちゃんのお母さんも、お父さんも、すごくやさしくて」
涙声でそう言うメイに、ドアの向こうの三宅は溜め息を漏らすことしかできない。
「それが彼らの擬態なんだ。普通に生きている人間に陰ですり替わり、肉体が朽ちるまで、その被害者本人として周囲の社会に溶け込む」
「嘘ですっ！！」

ドアの向こう側で、三宅は静かに目を見開いた。
「……わかった。もういい」
はじめて耳にした、メイの反抗的な声。
「君はもう、この件には関わるな」
だから彼はメイに、こう告げるしかなかった。
「あとは、俺が一人でやる」

トワイライト　1

1

学校をズル休みした。
メイにとって、それもはじめてのことだ。毎日通っていたアフスの訓練ですら彼女は体調不良以外の理由で休んだことがない。
そしてそれは三宅の配慮でもなく、任務を円滑に遂行するための命令でもなく、美羽に会う勇気のないメイが自分で勝手に決めたことでもあった。
「……」
カーテンを閉め切ったリビングは薄暗い。テレビの発する小さな音と光が、暗く静かな室内でいやに目立って感じられる。
三宅には悪いことをしてしまった。
正式なエージェントになる前からあれだけ三宅の役に立ちたいなどと得意気にうそぶいてきたくせに、いざ事件が起きると何もできず、駄々をこね、しまいには三宅にもあきれられてしまった。馬鹿な子供だ。
あれから時間が経ちだんだん頭が冷えてくると、三宅の言っていたことがどれも正しいのだということがよくわかる。
ＤＮＡ鑑定など待たずとも、少し考えればそれで済むことだったのだ。
?あの人、ただ者じゃない感じはするけど、所詮は人間でしょ??
美羽は自分でそう言っていたのだから。
彼女はメイに対しては、最初から隠す気などなかったのだ。
自分が人間ではないことを。
「美羽ちゃん……」
嘘だよね？　とつぶやきかけて、メイはそれが無駄であることを一層強く感じた。

アフスはもう、美羽とその家族を第二種有害ＵＭＡとして指定している。担当する執行官とエージェントに対し対象ＵＭＡの捕獲、または駆除の実行を許可する命令だ。
美羽は当然そのことを何も知らない。自分のせいで正体が割れてしまった彼女は、近いうちにアフスによってあのあたたかい家庭ごと壊されてしまうだろう。

――。
ピエログマの腕時計の針が昼の3時を指した。
メイはゆっくりと立ち上がると、赤い外套を羽織り、頼りない足取りでマンションの外へと出て行った。

2

外を吹く風は勢いを増していた。
今は晴れて日が射しているものの、今夜にでも嵐が来るだろうという気配がする。
小学校の校門が見える位置にある、民家の屋根の上に座り込んで、メイは児童が下校する様子をぼんやりと眺めていた。
やがて、5年3組の下駄箱のある方向から、目的の人物が現れる。
「……」
メイはやわらかに屋根から飛び降りると、校門付近でそれを待ち伏せすることにした。

「美羽ちゃん」
「め、めーちん！？」
私服姿のメイに突然声をかけられて、美羽は大きな目を丸くする。
「どうしたのこんなところで！　もう具合は良くなったの？」

「うん」
学校には体調不良ということで、三宅が電話を入れていた。
だから静かにそれだけ答えたものの、メイはそれ以上何も言う気持ちになれない。
「美羽ちゃん。お父さんやお母さんと一緒に、どこかへ逃げて」
「は、はぁ？」
美羽は驚きつつも、苦笑いを浮かべる。
「またまたぁ。いきなりなに言ってるのよ？」
「三宅さんは、アフスの執行官なの」
「しっこうかん？」
「うん。国家公安委員会の下位にある半民間半国家組織、危険ＵＭＡ特別対策庁――それがアフスの正式な呼び方。そしてわたしは、執行官を補佐するエージェント。悪いＵＭＡを駆除するのが仕事」
「……っ！」
アフスという略称や執行官などの役職名とは違い、危険ＵＭＡ特別対策庁の名前は、エージェントの存在と共に広く知られている。
まして自分達の生命を脅かす組織なのだから、知性の高いＵＭＡが知らないはずはない。
――だからそれだけで、メイの言いたいことは、美羽にすべて伝わった。
「ふ、ふははっ」
失笑する美羽。
「……そうだったんだ。あなた、あたしたちを騙したのね？」
「だ、騙してないよっ！」
それまで平静を装っていたメイも、その言葉は聞き逃せずに声を荒げた。
「知らなかったの！　美羽ちゃんの正体も、港で起きた事件も！」
「……。ふーん、そう。そこまで知ってるんだ」
蔑（さげす）むような冷たい眼差しを、メイに向ける美羽。
「じゃあ、今からなんとかしてよ。友達でしょ？　あたしたちを助

けてよ」
「わたしじゃ、どうにもできない。それが、三宅さんのお仕事だから」
「なによそれ。話にならないじゃない」
かぶりを振る美羽。
「あたしはあの三宅さんって人、最初はめーちんのしもべか何かだと思ってた。けど、本当は逆だったんだね。なぁんだ」
「……」
黙りこむメイを、美羽は鼻で笑った。
それから一転して、今度は寒々しい笑顔になる。
「わかった。わざわざ教えてくれてありがとう」
「う、うん」
「あたしたちは逃げる準備をするから、春日さんもウチに帰るといいよ。ここにきてること、ヒミツなんでしょ？」
「……っ」
呼び方が？めーちん？から？春日さん？に変わっていた。
それから、いい加減な動作で手を振って、その場から去ろうとする美羽。
「あ、あの！」
そのまま行かせてはいけないと、メイは彼女を呼び止めた。
「なに？　まだ何か用なの？　春日さん」
「もう、人間を襲わないって約束してほしいの！　そうすればアフスの人も、追って来ないと思うから……」
「……」
美羽はしばらく返事をしなかったが、
「そうだね。そうでしょうね」
やがてさびしげな微笑みを浮かべてそう言って、下校路を一人で帰っていった。
――もう決して、その横を歩き、一緒に帰る日は来ないだろう。
メイは美羽の背中を見つめながら、おぼろげにそう感じていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5887y/

黒色トワイライト

2011年11月23日12時55分発行